

五千石遺跡

GOSENGOKU SITE

— 1区発掘調査概報 —

2007

長岡市教育委員会

株式会社大石組

例 言

- 1 本書は、新潟県長岡市寺泊教ヶ曾根及び燕市五千石地内の大河津分水路左岸河川敷に所在する五千石遺跡1区の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は大河津分水路可動堰改築事業に伴い、長岡市が国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所（以下、国交省）から受託して実施した。
- 3 調査主体である長岡市教育委員会（以下、市教委）は、発掘調査及び整理作業を株式会社大石組に委託し、平成18年6月から平成19年3月に実施した。
- 4 9pの「大河津橋の変遷」は、信濃川大河津資料館研究員 樋口 勲氏から玉稿を賜った。
- 5 表紙および1・2pの写真の著作権は国交省が所有する。また、9pの写真の著作権は信濃川大河津資料館が所有する。
- 6 第1図は国土地理院平成17年発行の1：50000「弥彦」「三条」「長岡」を元に作成した。
- 7 第5図は赤彩部分をスクリーントーンで示した。
- 8 調査から本書の作成まで、多くの方々からご協力、ご教示を賜りました。記して御礼を申し上げます。
信濃川大河津資料館 小林巖雄 鈴木俊成
三ツ井朋子 （敬称略・五十音順）

平成18年度調査体制

調査主体	長岡市教育委員会 （教育長 笠輪春彦 ～平成18年12月） （ 同 加藤孝博 平成19年1月～）
管理	山屋 茂人（長岡市立科学博物館館長） 小林 和之（ 同 館長補佐） 駒形 敏朗（ 同 副主幹）
監督	加藤由美子（ 同 学芸員）
調査組織	株式会社大石組
現場代理人	吉原 昭蔵（大石組遺跡調査事業部主任）
調査担当	岩松 和光（ 同 調査員）
調査員	竹部 佑介（ 同 調査員）

「五千石遺跡」発見とその意義

平成17年5月、信濃川大河津分水路の可動堰改築工事現場で、古墳時代の遺跡が発見された。場所は、大河津分水路左岸の河川敷で、信濃川大河津分水路に架かる国道116号線の大河津橋の下である。遺跡の所在地は、三島郡寺泊町（現、長岡市）と西蒲原郡分水町（現、燕市）にまたがっている。6月には、遺跡が所在する寺泊町と分水町の両教育委員会が、新潟県教育委員会の協力を得て、遺跡の試掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期、古墳時代前期・後期、それに平安時代の集落跡が広がっていることを確認し、遺跡名を地名から「五千石遺跡」とした。そして、五千石遺跡の発見は、地域の考古学調査・研究に新発見や、確認事項、それに再検討する事項を提供することにつながった。

例えば、新発見の五千石遺跡が位置する場所は河川敷であり、少なくとも五千石遺跡周辺では水路部分だけが工事で掘削された範囲であり、遺跡が所在する河川敷部分は掘削されていないことを再認識したことである。しかも、分水路通水後の約80年の間にたびたび発生した洪水で、工事前の地表面を1m近くもの土砂が覆い、遺跡を旧地形のまま地下に保存する役割も果たしていたことを、試掘調査で確認した。

このことは、分水路工事で地形が改変されたと考えて、出土位置を疑問視していた夕暮れの岡遺跡（古墳時代中期、子持勾玉と提瓶の採集地、旧分水町国上）や、渡部遺跡（中世の珠洲焼の甕出土地、旧分水町渡部）などは、五千石遺跡の例から、現在の河川敷に位置していても何ら不思議でないことを示している。洪水がもたらした1mもの土砂が堆積している河川敷で、遺物の表面採集（遺跡分布調査）は不可能に近い。だが、河川敷を掘削する工事等が予定された場合には、試掘調査を行って、遺跡の有無を確認する必要がある。大河津分水路河川敷には、五千石、夕暮

れの岡、渡部の3遺跡が位置することが確認されただけに。

次は、分水路で隔てられている現在の旧寺泊町大河津地区と旧分水町五千石地区は、分水路掘削前は地続きであったことを再確認したことである。五千石遺跡がある長岡市寺泊地区から和島地域にかけての大河津分水路左岸側には、「祝沼垂城」などの木簡を出土した八幡林官衙遺跡や、古代寺院跡の横滝山廃寺遺跡など、奈良時代から平安時代の越後、あるいは古志郡の古代史を語る上で欠かせない遺跡が多数存在している。

それに対し、分水路で隔てられた右岸側の燕市分水地区には五千石遺跡より1年前に発見、発掘した上町遺跡など数箇所しか古代の遺跡は確認されていない。上町遺跡は古墳時代中期の集落跡と9世紀代の集落跡である。出土した須恵器の坏の中に「田屋」「井？」が底面に墨書されたものが含まれており、古代史を調査・研究する上で重要な遺跡である。上町遺跡をはじめとする分水地区の古代遺跡は、現在では分水路で長岡市側に点在する古代遺跡群と隔てられているが、かつては島崎川などを通じて濃厚な関係を維持していたと想像され、再検討の時期に来たといえよう。

また、今回の発掘調査で確認された主な遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、それに方形周溝をもつ建物跡である。いずれも古墳時代前期で、位置は古墳時代前期集落の東端部分と思われる。五千石から信濃川を少し遡った左岸の丘陵に弥生時代後期の方型台状墓の屋鋪塚遺跡と、大久保古墳群がある。だが、その近くには弥生時代から古墳時代の集落遺跡は確認されていない。古墳時代に限りみるならば、五千石が大久保古墳群の造営に関係した集落一母村の可能性も検討に値するのではないか。それに調査の進展によって、屋鋪塚遺跡の方型台状墓の被葬者との関係についても検討するときがくるかもしれない。今後期待したい。

（駒形）



写真1 五千石遺跡周辺

調査の経緯

平成17年5月5日、地元新聞「越後ジャーナル」が、大河津分水路可動堰改築事業（事業主体：国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所）工事地内で土器が発見されたとのニュースを報じた。地元の寺泊町・分水町の両教育委員会は、新潟県教育庁文化行政課と共に現地視察を行い、5月30日～6月10日に確認調査を実施した。その結果、事業地内に縄文時代から古代にかけての新遺跡の存在を確認し、遺跡名を「五千石」と名付けた。

事業に係る五千石遺跡の面積は33,500㎡と広大で、保存も含む遺跡の今後の取り扱いについて国土交通省と県教委、両町教委の四者は協議を持った。その結果、事業の中止や内容変更は不可能という結論に達したため、平成18年から20年の3年間で遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を寺泊町・分水町の両教育委員会が実施することで決定した。その後、平成18年1月に寺泊町が長岡市に、同4月に分水町が燕市に合併したため、発掘調査業務も長岡市・燕市両教育委員会へ引き継がれた。平成18年1月20日、国交省と長岡市・燕市は、五千石遺跡の発掘調査と報告書作成に係る業務について協議書を交わし、今後はこれに則り事業を進めることとなった。

調査では遺跡を5つに区分けし、平成18年度は長岡市が1区（実調査面積約3,500㎡）、燕市が2区を担当した。長岡市教育委員会は、発掘調査及び整理作業・概報作成に至るすべての業務を、株式会社大石組に委託し調査を実施した。

6月中旬から重機による表土除去作業を行い、同下旬には作業員を導入し本格的な発掘作業を開始した。7月19・20日、大河津分水路の増水に伴い調査区が水没し、調査に多大な被害が生じた。10月29日、現地説明会を実施し、晴天に恵まれ255人の来場者を得た。11月中旬には発掘調査を終了し、引き続き整理作業に入った。（加藤）

周辺の遺跡

ここでは五千石遺跡1区（1）と同時期にあたる縄文時代晩期、弥生時代後期、そして古墳時代前期の3時期を中心に周辺を見ていく。

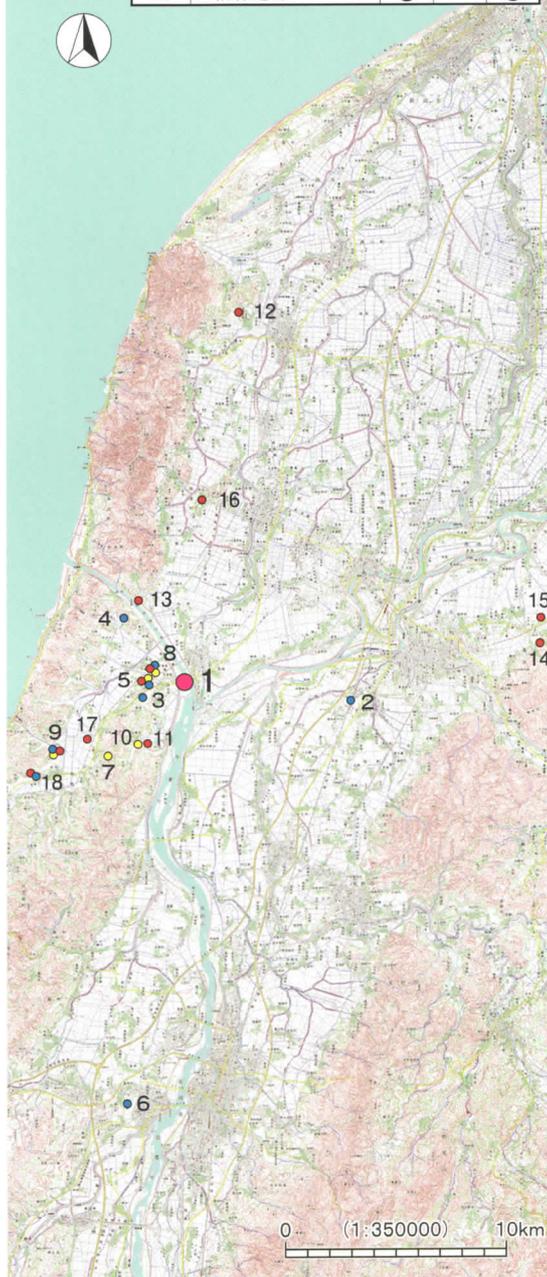
縄文時代晩期の長畑遺跡（2）は終末期の遺跡である。五千石遺跡から出土した縄文土器と非常に似た器形と施文の土器が、長畑から出土している。また五千石遺跡の約2km南西に位置する松葉遺跡（3）からは土偶や玉類などが出土し、この時期の集落跡であったと考えられている。他には、幕島遺跡（4）、横滝山遺跡（5）、藤橋遺跡（6）がある。

弥生時代後期の赤坂遺跡群（7）は、標高約90mの丘陵上に位置し、大規模な環濠を持つ高地性集落である。五千石遺跡から程近い諏訪田遺跡（8）では、工房跡は検出されていないものの、玉作関連の遺物が多数出土している。また、島崎川流域に位置する奈良崎遺跡（9）から検出された1号周溝墓は、1辺が約12mの方形で県内有数の規模を持つ。他には横滝山遺跡（5）がある。

古墳時代前期は、五千石の集落形成時期であり、近隣には重要な古墳が存在する。方形台状墓の屋鋪塚遺跡（10）に後続する大久保古墳群（11）には、前方後方墳2基と方墳1基が存在する。全長約54mと、越後で最大規模を誇る前方後円墳の菖蒲塚古墳（12）は国指定史跡であり、非常に優れた仕上がりのだ龍鏡も出土した。夕暮れの岡遺跡（13）付近から検出された子持ち勾玉と提瓶は、その近辺に古墳の存在を感じさせる。保内三王山古墳群（14）と吉津川遺跡（15）からは古墳とそれに伴って形成された集落の関係がうかがえ、五千石の周辺にある古墳群と、そこに住む当時の人々との関わりを探る上でも十分参考になる。他には稲葉塚古墳（16）、門新遺跡（17）、奈良崎遺跡（9）がある。

また近隣には、豊富な文字資料を持ち古代にかけて機能した官衙遺跡として有名な国指定史跡の八幡林遺跡（18）が存在する。（松井）

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳
1	五千石遺跡	●	●	●
2	長畑遺跡	●		
3	松葉遺跡	●		
4	幕島遺跡	●		
5	横滝山遺跡	●	●	●
6	藤橋遺跡	●		
7	赤坂遺跡群		●	
8	諏訪田遺跡		●	●
9	奈良崎遺跡	●	●	●
10	屋鋪塚遺跡		●	
11	大久保古墳群			●
12	菖蒲塚古墳			●
13	夕暮れの岡遺跡			●
14	保内三王山古墳群			●
15	吉津川遺跡			●
16	稲葉塚古墳			●
17	門新遺跡			●
18	八幡林遺跡	●		●



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



写真2 調査区全体（右上が北）

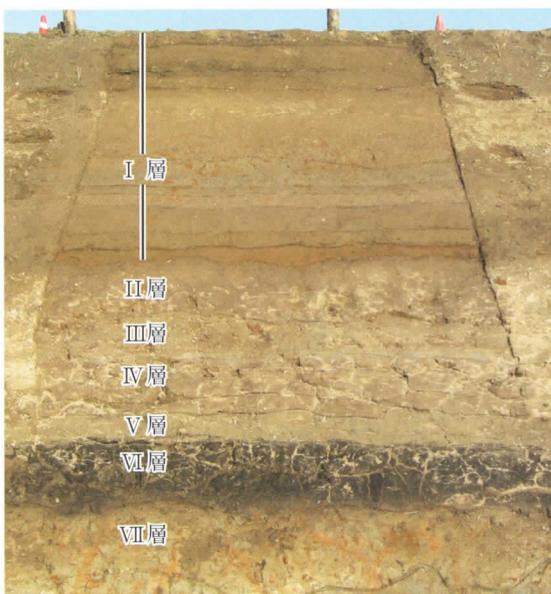


写真3 基本土層

五千石遺跡の位置

五千石遺跡は新潟県のほぼ中央、弥彦山を北方に望む大河津分水路の左岸、標高10mの河川敷内に立地している。遺跡周辺では、丘陵裾部や旧信濃川により形成された自然堤防上に街区や農村集落が展開している。大河津分水路は越後平野を「横田切れ」（明治29年）等の水害から守る目的で明治42年に本格的な開墾工事が始まり、可動堰が完成を見たのは昭和6年である。今回、可動堰の改築工事に伴う発掘調査によって五千石遺跡が現在の居住区よりさらに低地側へ下った微高地上に遺存している状況が明らかになってきた。

遺跡の層序

写真3は調査区北壁の土層断面写真である。地表面から1.6mを掘下げると大河津分水路に通水が始まる以前の旧地表面に到達する（第I層）。第II層から第V層は遺物はほとんど確認されず、遺構検出にはいたっていない。当該期の遺物包含層である第VI層は調査区全域に、おおむね0.2~0.3mの厚みで堆積している。第VI層面の標高は9.7m、調査区南側のコンクリート橋脚跡付近では標高10.5mとなり、VI層面は南へ100mで0.8m微高している。第VII層面は主に古墳時代から縄文時代の遺構確認面になっている。

検出遺構の概要（第2図～第6図）

直下写真（写真2）の南西から北東へ蛇行する黒川は、調査1区の東をかすめて大河津分水路に合流するが、この黒川とみられる旧河道（NR01・02）が東西方向に幅15mにわたって、調査区の北側を横断している。また奇しくも、大河津分水路に架かる初代木造橋と2代目のコンクリート橋脚遺構が出土している。これについては後述する。

古墳時代前期の遺構は、竪穴住居跡（SI01、SI02）2軒と掘立柱建物跡（SB01～SB08）8棟、周溝を持つ建物跡（SB09）1棟および、土坑（SK01・06、SX05）3基が主体をなす。

弥生時代は後期を中心に少量の包含層遺物を確認しているものの遺構はとらえがたく、土坑（SK07）1基がその可能性を有する。覆土についてみると、古墳時代の覆土は標準土層第Ⅵ層ベースの黒色土であるのに対して、縄文時代は第Ⅶ層を基調とし炭化物粒子の混入する覆土（Ⅵb層）なので、両者とも特徴があるが、その点SK07の覆土は黒色土系であり古墳時代の覆土に近い。縄文時代は、現時点において晩期の遺物を出土する土坑SK11、SX10をあげるができるが、プランは不整形で皿形にくぼむものが多い。

掘立柱建物跡 2グループのまとまりがある。黒川旧河道の南岸に展開するAグループは、3棟の平均柱間が梁行4m、桁行4.4mであるが、調査区中央のBグループ4棟は平均の梁行3.15m、桁行3.3mと、建物規模が一回り小さくなっている。両群とも2間×1間の建物が主体となる。桁行3間のSB02をふくめても、正方形もしくはそれに近い建物プランが多い。また柱穴を観察すると掘方はさらに一段、柱痕跡部分が深くなり、建物には過荷重が加わったとみられる。SB01の柱穴から甕（第5図7）が出土している。

竪穴住居跡 SI01は橋脚跡西側の拡張部に位置する。規模は5.6m×5.6m、平面形は正方形プランをもち西壁に入り口と見られる張り出し部が認められる。主柱穴4基を検出しているが、炉跡は未検出である。住居は火災をうけており、一部壁沿いに埋め込まれた矢板材も炭化した状態で出土している。覆土は大きく削平されており図示できる遺物は出土していない。SI02は橋脚跡に北側コーナーを切断されている。規模は4.7m×(5m)、主柱穴3基を検出するが、炉跡は未検出である。二重口縁壺（第5図8）と、ヒスイ製勾玉（写真21）が出土している。未検出の火床については後世の破壊をうけたことが考えられる。また焼土の赤橙色が痕跡として残らない何らかの要因がはたらいっているのだろう。



写真4 掘立柱建物跡（Aグループ）



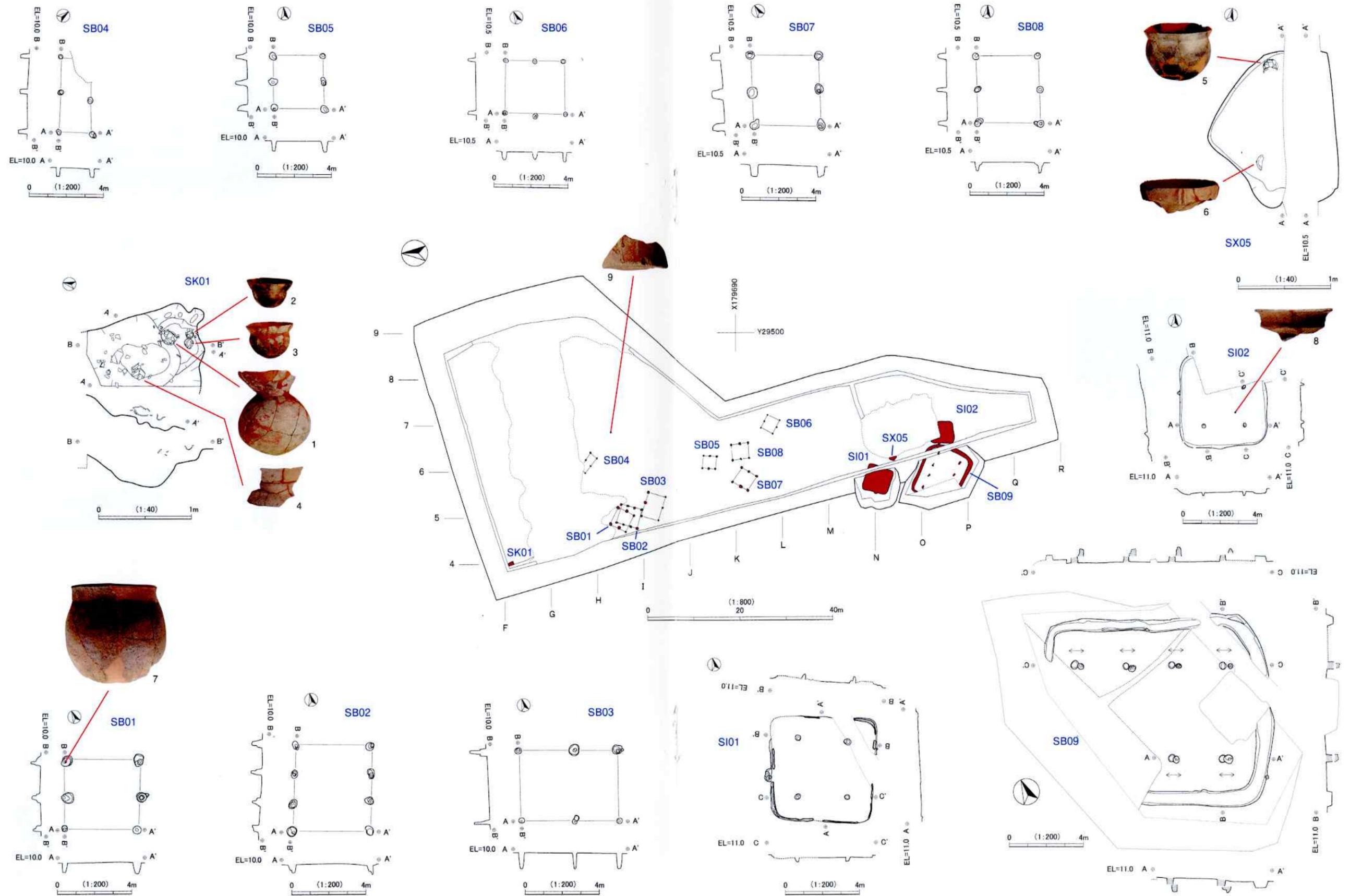
写真5 SI01遺物出土状況



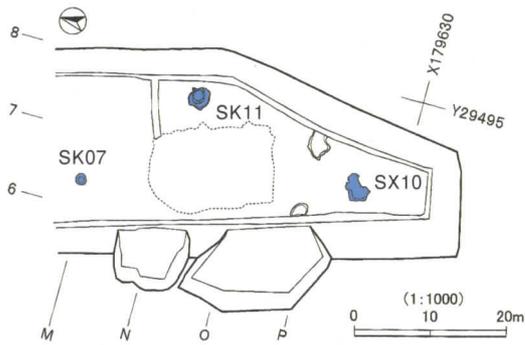
写真6 SI02遺物出土状況



写真7 SB09全景



第2図 古墳時代の遺構 (遺物番号は第5図に対応)



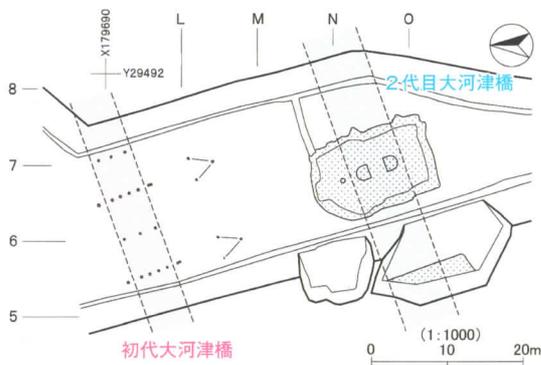
第3図 縄文・弥生時代遺構分布図



写真8 SK07遺物出土状況



写真9 SK11遺物出土状況



第4図 旧大河津橋橋脚配置図

周溝を持つ建物跡 (SB09) コンクリート橋脚跡西側の拡張部に位置する。掘立柱建物部分は3間(8.0m)×1間(5.0m)の東西棟で、これを取囲む溝は真々距離で東西11.5m、南北9.5mである。長軸方位はN-65°-Wを向き、掘立柱建物跡SB06、SB03がこれに近い向きである。竪穴住居跡SI01の入口が西側にあることを考えると、建物の周溝部西側にブリッジの存在した可能性もあるが、橋脚跡に攪乱されて不明である。検出された6基の柱穴は、自然的要因により水平方向にズレを生じている。器台・高坏の脚片と溝から土師器片が出土しているが、図示できる遺物は少なく、本文中の天王山式土器片やアメリカ式石鏃(写真21)、縄文土器(第6図63)は建物跡の出土遺物である。集落のなかでは一般的な遺構ではなく、生活域にあって特別な位置付けがなされていたと思われる。建物の性格については今後の課題である。

土坑 SK01は調査区の北西隅に位置する。規模は1.2m×0.8m、土坑底から0.4mが遺存する。二段に掘り入りこまれて、浅い段に沿うように丸底壺(第5図1)は倒立して、その脇には小型丸底壺(同2・3)が正立状態で並んで出土している。二重口縁壺片(同4)はやや離れている。覆土下層には人為的埋土が認められる。SX05は南北に1.6mを残して橋脚跡に削平されている。覆土最下層から二重口縁壺片(同6)と小甕(同5)が出土している。SK07は径1.6m深さ0.25mの円形土坑であり、浅く皿形状を呈する。覆土はⅥ層基調の黒色土であった。直口縁壺片(第6図53)と甕形土器片(同54)が出土している。SK11とSX10は不整形なプランを呈し3m前後の規模をもつ。覆土はⅦ層基調の土に炭化物粒子の混じるⅥb層の土に近い。

調査区の全景写真にみられるように、このほかにも集落を構成している柵列や溝遺構、各時代の土坑、ピットが出土しており、本報告によって全容を明らかにしたい。(岩松)

大河津橋の変遷

大河津分水路には、全部で4本の橋が架かっており、一番上流に架かっているのが大河津橋である。このたびの五千石遺跡の発掘調査で、初代、2代目の大河津橋の橋脚基礎（第4図）が出土したことに伴い、大河津橋の歴史を簡単に振り返ってみたい。

大河津分水路通水以前、現在の大河津橋付近には「県道片貝線」が通っていた。大河津分水路の開削により遮断されるため、大河津橋の架橋となったものである。

初代は、新潟県により建設された橋長624mの木橋であった。地域の方々の話によると、通行の主体は、歩行者と荷馬車で、地藏堂で市が開催される日は通行量が多かったという。また、洪水の度に橋桁付近まで水位が上がり、時には、長野県から流れてくるリングを橋の上からすくえる程だったという。当時、大河津分水路への計画放流量は5,570 m³/sで現在の約半分である。従って、橋桁は現在より低い位置であったと考えられる。

2代目は、鉄筋コンクリートの基礎を持つ橋で新潟県により初代のやや上流側に建設された。また3代目は、新潟国道、長岡国道両工事事務所により、2代目のやや上流側に建設され現在に至る。

3代目竣工に際し、大河津橋右岸には、良寛さんの「心月輪」の記念碑が建立された。かつて、信濃川の水害を憂いだ良寛さんに、大河津分水と大河津橋の活躍をぜひ見ていただきたいものである。（樋口）

年 号	西 暦	大河津分水と大河津橋
明治40年	1907	大河津分水工事（正式名称：信濃川改良工事）の実施が帝国議会にて決定
明治42年	1909	大河津分水工事が本格的に開始
大正9年	1920	10月、初代大河津橋が完成 橋長624m、幅員3.7m
大正11年	1922	大河津分水路が通水
昭和17年	1942	3月、2代目大河津橋が完成 新潟県による工事で橋長634m、幅員5.5m
昭和57年	1982	11月、3代目（現在）の大河津橋が完成 建設省による工事で橋長635m、幅員11.25m



写真10 初代大河津橋と雪（昭和8年2月）



写真11 2代目大河津橋
（昭和50年代中頃、左は建設中の3代目橋脚）



写真12 3代目大河津橋と平成18年7月洪水
（水面下に遺跡発掘現場がある）



写真13 発掘調査で出土した初代大河津橋の橋脚

参考文献：信濃川開削工事工務報告、信濃川大河津分水誌第2集、OHKOUZU第9号、大河津橋建設工事パンフレット、新潟新聞
※文章中の機関名は、関連当時の名称としました。



写真14 SK01 遺物出土状況



写真15 高坏・器台出土状況 (4H-18地区)



写真16 包含層遺物出土状況 (7J-6地区)



写真17 SX05遺物出土状況

遺物 (第5図・第6図)

主体となるのは土師器で、コンテナで約38箱ある。その他には弥生土器および縄文土器がそれぞれ約1箱出土した。包含層からの出土がほとんどで、遺構出土遺物は少ない。土器以外では縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての石器・石製品が出土している。出土量から、当地区の主体となるのは古墳時代前期であり遺構も同時期に属すると思われる。

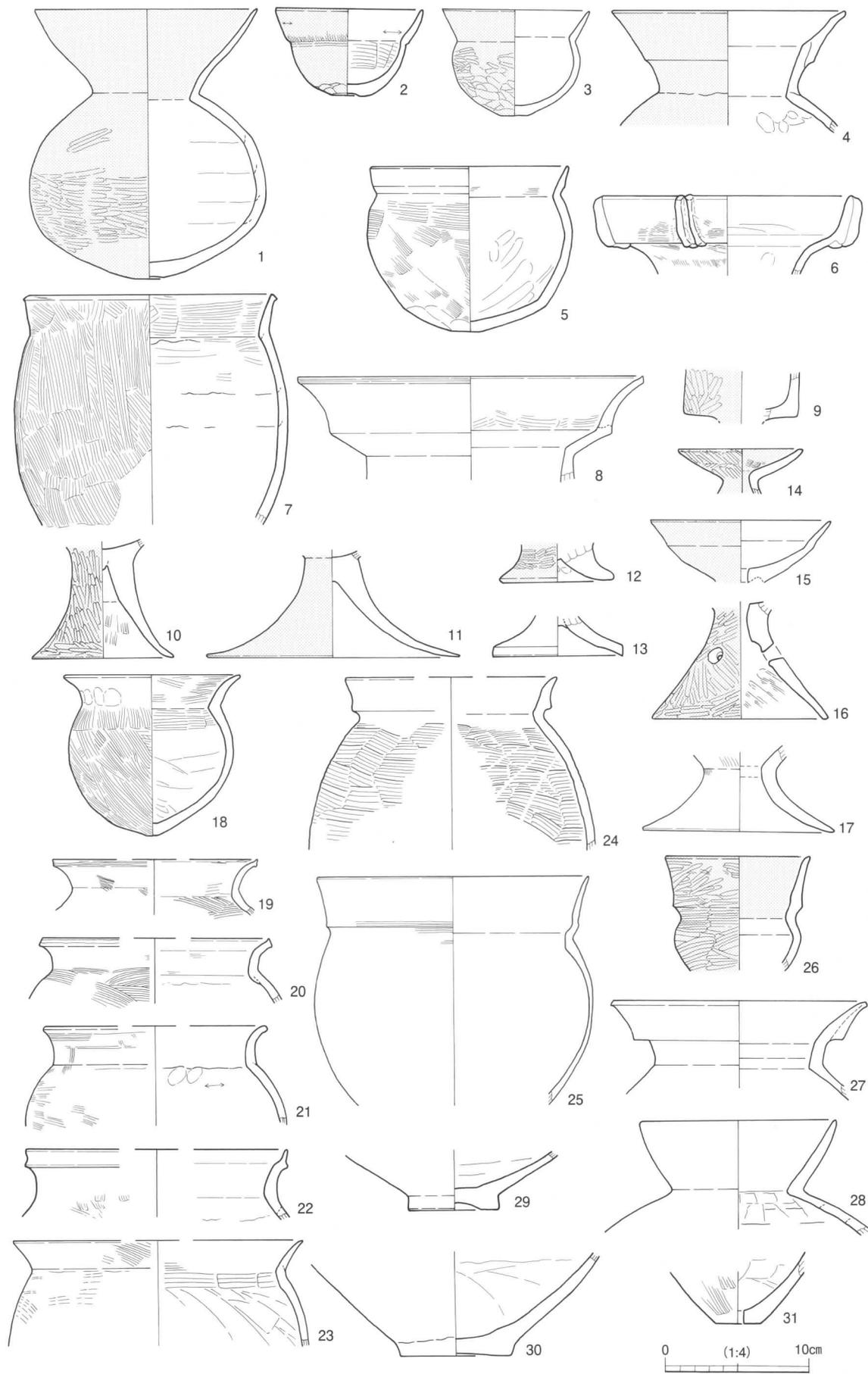
古墳時代の土器 (1~31) 土師器のみが出土した。包含層出土遺物は調査区全体に広がり、特に掘立柱建物群のある調査区北側に多い。祭祀に伴うと考えられる赤彩された土器や、高坏・器台も掘立柱建物跡付近に集中する傾向があり、遺構の少ない調査区北東部ではほとんど出土しない。この遺物の分布傾向は、掘立柱建物群の性格・配置や集落内祭祀の内容と関わる可能性がある。

また7J-6地区では合計でコンテナ1箱以上の土師器の甕類(19~22)が出土し、集落端の土器捨て場の可能性が考えられる。

包含層出土遺物の(9)は赤彩されており祭器の一部だと考えられる。器形から、東海地方に見られる高坏の受部である可能性も考えられる。第2図に出土位置を示す。

遺構出土の遺物は、SB01柱穴出土の甕(7)、SI02出土の二重口縁壺(8)、SB09出土の甕類細片などである。

SK01 出土遺物の中で特徴的であるのがSK01出土遺物である。丸底壺(1)と小型丸底壺2点(2・3)、二重口縁壺(4)が共伴し、全て外面に赤彩が施される。1~3外面は密にミガキ調整されている。小型器台は伴わず、小型丸底壺2点は土坑内のテラス部を利用して正立した状態で出土した。きわめて祭祀性の強い遺構として、当該期の集落内祭祀のあり方を知る重要な出土例だと言える。小型器種による土器祭式の定着した同時期の事例として新潟市東^{ひがしかこい} 遺跡などが挙げられる。合わせて検証を進める必要がある。



第5図 古墳時代の土器



第6図 弥生・縄文時代の土器

報告書抄録

ふりがな	ごせんごくいせき							
書名	五千石遺跡							
副書名	1区発掘調査概報							
巻次名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗・加藤由美子・岩松和光・竹部佑介・松井奈緒子・樋口 勲							
編集機関	長岡市教育委員会・株式会社 大石組							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号0258-32-0546							
	〒940-0081 新潟県長岡市南町2丁目4番4号 電話番号0258-35-5511							
発行年月日	2007年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごせんごくいせき 五千石遺跡	ながあかしてらどまりつるがそね 長岡市寺泊敦ケ曾根 つばめしごせんごく 燕市五千石 おおこうづぶんすいろかせんじき (大河津分水路河川敷)	15202	1250	37° 37′ 4″	138° 50′ 4″	2006年 6月19日～ 11月17日	3,500㎡	大河津分水路 可動堰改築事業 (事業主体： 国土交通省北陸地 方整備局信濃川河 川事務所)
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	縄文時代晩期 弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 周溝を持つ建物跡 土坑・ピット	2軒 8棟 1棟	縄文土器 弥生土器 土師器 石製品	コンテナ 1箱 〃 1箱 〃 38箱 〃 2箱	古墳時代前期の集 落遺構として竪穴 住居跡と掘立柱建 物跡群、周溝を持 つ建物跡がある。	

五千石遺跡 - 1区発掘調査概報 -

2007(平成19)年3月10日印刷 編集：長岡市教育委員会
株式会社 大石組
2007(平成19)年3月15日発行 発行：長岡市教育委員会
印刷：株式会社 第一印刷所